

## 第1回若年層の投票率向上推進計画策定ワーキンググループ議事録要旨

- 日 時 令和3（2021）年9月16日（木）10:00～12:00
- 場 所 栃木県庁本館8階会議室4 ほか（オンライン会議形式）
- 出席者
  - [委員]
  - ・ 支援者  
青崎 智行委員、加納 麻紀子委員、高橋 一博委員、長 裕之委員、名村 史絵委員
  - ・ 若者（当事者）  
阿部 瑞樹委員、落合 美帆委員、埴 蒼空委員、濱野 将行委員、渡邊 幸樹委員
- [県選挙管理委員会]  
萩原 英樹書記長、岡田 和広書記長代理、大根田 起司選挙係長 ほか

### 1 書記長挨拶

若年層の投票率向上推進計画策定事業の趣旨を御理解いただき、ワーキンググループ委員をお引き受けくださり、厚く御礼申し上げます。

今回は、初回であり、対面形式での開催を模索していたが、新型コロナウイルス感染症に係る本県の緊急事態措置の期間が延期となったことを踏まえて、オンラインによる会議とさせていただいた。

選挙は、民主主義の基盤をなすものであるが、近年、選挙の投票率は低迷しており、とりわけ20歳代を中心とした若者の投票率は低い水準にあり、憂慮すべき状況にあると考えている。

このため、県選挙管理委員会では、若年層の投票率向上を目的として、地域の様々な機関が連携協力し、選挙啓発事業を効果的に実施していくために、若年層の投票率向上推進計画を策定することとした。

本ワーキンググループは、計画内容や具体的な選挙啓発の方策等を検討する場として設置し、当事者である若者が自らの問題として考え、それを有識者等が支援する構成とした。

検討に当たっては、啓発事業の評価と見直しを行うとともに、デジタル技術の活用など新たな視点も踏まえ、議論を重ねて参りたい。

本日は、初回であり、事務局から事業の目的、選挙についての意識調査、本県の選挙啓発事業などについて御説明させていただいたのち、なぜ、若者の投票率は低いのか、どうしたら投票率が向上するか、率直な御意見・御感想を賜りますようお願い申し上げます。

### 2 座長選出

委員の互選により、青崎智行委員が座長に選出された。

また、座長の指名により、名村史絵委員が座長代理に指名された。

### 3 座長挨拶

私は、広告産業を研究してきたこともあり、情報発信の観点から貢献していきたいと思っている。このワーキンググループでは、若い委員の皆様を主役として、若者の意見、考え方などを聞きながら、若年層の投票率向上を目指して、委員の皆様と議論を重ねて参りたいと考えているのでよろしくお願い申し上げます。

### 4 議題

事務局から資料に基づき、「若年層の投票率向上推進計画の策定について」及び「本県における選挙啓発について」説明後、事前にDVDで配布した8月26日開催の主権者教育オンライン講演会等も踏まえて、「なぜ、若者の投票率は低いのか」、「どうしたら投票率は向上するか」について意見交換を行った。

#### ー委員意見要旨ー

##### ○委員

資料2ページ「年齢階層別投票率」について、令和2年11月執行の栃木県知事選挙の平均投票率は38.73%と低いが、新型コロナウイルス感染症の影響はあるか。

若者に対しては、不要不急の外出自粛が特に求められていたと記憶しているが、知事選の投票率は、予想できた数字なのか、また、新型コロナウイルス感染症と投票率の関係について調査が行われていたら伺いたい。

##### →事務局

新型コロナウイルス感染症と投票率の関係についての調査は実施していないが、一定の影響がなかったとは言えないと思っている。

例えば、選挙の立候補者が行う演説会等の人が集まる選挙運動については、規模を縮小したり自粛したりといった配慮がなされていたのではないかと。また、選挙管理委員会としても、対面での直接的な啓発は難しい状況であったため、何らかの影響はあったのではないかと。思う。

投票率については、令和2年は38.73%であり、平成28年知事選の33.27%と比較して約5ポイント増という結果なので、新型コロナウイルス感染症の影響が多少あったにしても、選挙啓発に一定の効果があったと考えている。

##### ○委員

主権者教育オンライン講演会を視聴して、幼いころから、親と一緒に投票所に行くことで、選挙に行くことが当たり前という気持ちを作ることが大事だと思った。私も幼いころ、両親と一緒に投票所に行ったことがあり、選挙があったら投票に行くということが当然のことだと考えていたので、そういう気持ちを作っていくことが、投票率の向上に繋がると感じた。

○委員

資料2 ページ「年齢階層別投票率」について、若者は低く、年齢が上がるほど高くなっていくという傾向は、最近に顕著なものなのか、昔から変わらないものなのか。

→事務局

若者が低く、年齢とともに上がっていくという折れ線グラフの形は、以前から見られる傾向にある。

→委員

投票に行っていなかった若者が、どういう状況になったら行き始めるようになるのか興味深い。

○委員

なぜ、若者が投票に行かないかということについて、2点考えた。

1つは身近でないということである。バイト先の塾に公民が苦手な中学生がいて、理由は、一番身近じゃない、何をやっているのかわからないからと話していた。公民は社会科であり一番身近だと思うので衝撃を受けた。学校での模擬投票もなかなか実感が湧かなかったようであった。一度苦手意識を持ってしまったもの、遠い存在だと思ってしまったものを、身近に、自分ごとにするのは難しいことだと思う。

反対に、積極的に選挙に行っている友人がいて、その友人の意見として、自分が行かないと若者の意見が選挙を通じて反映されないということを書いていた。

若者に対して、丁寧な説明があると投票に行くようになるのではないかと思う。選挙で自分の意見が反映される、投票に行かなかったことで、意見が反映されていないから何かしらの不満を抱えているのではないかと、といったことを丁寧に説明すると効果があるのではないかと。

2つ目は、関心がないということである。関心がないことについて自分なりに考えて、理由は2つあると思う。

1つ目は、政治について議論ができない雰囲気、風潮があるのではないかと思う。あの政策はこうだよねとか、○○党、△△党、そういった話や言葉を出したときに、浮かないか心配である。なかなか話しづらいと思うので、話せる場を作ることや、選挙の啓発に携わるなどの役割、例えば、自分は本ワーキンググループ委員の立場になったことで、人に話しやすくなったので、選挙に関して何か役割を持つと話しやすくなるのではないかと考えた。事務局の「とちぎ選挙ユースサロン」も良い取組だと思う。

もう1つの理由として、候補者を知らないという人が結構いるのではないかと。候補者を知らないというのは、政策を知らないことと大体同じだと思うが、政策や候補者の主張を調べることはとても時間かかるので、自分の考えに近い候補者を簡単に探せるようなア

プリなどがあればいいなという話も友人から提案があった。

先ほどの若者の投票率の傾向について、1967年からの衆議院議員総選挙の年代別投票率のグラフがある。20歳代の投票率は、ほぼ一貫して一番低いですが、1967年だけは、20歳代が70歳代以上を上回っている。

このグラフで注目したのが、2009年以降全ての年代で投票率が減少傾向にあり、若者だけではなく、その他の世代も低下している。そうなると、親とともに選挙に行く経験も積みにくく、投票率が更に低下していってしまうという悪循環に入っているのではないかと思った。

#### ○委員

教育の役割と啓発の役割の2つの部分があるのだと思う。伺った話を整理すると、投票に行く動機付けはおそらく大きく2つあって、啓発をとおして、投票の呼び掛けの中で行く、いわゆる外発的な動機付けの部分と、自分の中で行きたいと思う内発的な動機付けと言うのだろうか。選挙に行きましょうと呼び掛ける啓発は、外発的な動機付けで、自分の中で、本当に行きたいと思う部分を作っていくのは、教育の部分に当たるのではないかと思う。

また、親と一緒に投票に行ったという経験を経て、投票に行くことは、これは外発でも内発でもなくて、いわゆる習慣として当たり前だと思って行く部分、ちょうど中間にあたるようなところもあるのではないかと思っている。

教育の部分で言うと、学校教育の中での課題がある。先生が質問を投げ掛けて、それに対して、1つ答えを返すという、いわゆる一問一答的な学習というものに慣れ親しんでいるが、政治の世界では、そのような一問一答は普通はない。世の中には、いろいろな考え方や価値観の対立があって、その対立をどうやって合理的に皆で話し合い調整して合意形成していくか、その営みが政治なのであって、教育の中でそのような訓練が足りていないというところはあるのではないかと思う。

学校教育の中での教科の学習にしても、先ほどの公民の勉強が身近でないというところは、反省点としてあるわけで、「国会には衆議院と参議院の2つがある」といった一問一答的な学習のみではなく、社会的な課題・テーマについて、そのことを皆で議論する、話し合う、対立する2つの意見を吟味して、意見を言い合うなどが普段の学校での教育活動に定着していくと、自然と社会に関心が向いて、世の中のいろいろな問題・テーマに目が向いて、それが内発的な動機付けになって、投票行動に繋がっていくという整理ができるのではないかと思う。

#### →委員

大学の授業の中で、政治や選挙の動向について、客観的な事実即して話すことはある程度できて、様々な考え、価値観、背景、政治信条を持った学生がいるであろうことを

考えたときに、どこまで踏み込んで良いのか躊躇するところが多少ある。

一問一答ではない、非常に複雑な状況を生徒と議論するためのトレーニングをどのように積むかについては、一人一人の教員の裁量によるところが大きいのか。

→委員

もちろん教員の技量や教え方等の積み上げ方というところはあるが、今、国の教育の大きな流れが、そういう方向に向いているのは間違いない。

「探究的な学び」という言葉がよく言われているが、国が定めている学習指導要領に、それぞれの教科の中でどのような学びをするか、教科以外の部分でどういったことを取り組んでいくかというある程度の枠組みがあって、その中で、そこに重きを置いた授業を展開するという方向性は示されている。そこをどう学校現場の中で、改善して定着していくかということが大きな課題なのではないかと思う。

どうしても今までの従来型の授業から抜け出せないという部分は、教員の中には課題としてあるわけであるが、教育委員会としても力を入れていかなければならないと思っている。

○委員

過去の投票率と、とちぎ選挙ユースサロンの活動内容・取組について説明を伺いたい。

→事務局

衆議院議員総選挙の年代別投票率の推移について、1967年の投票率は、20歳代が70歳代以上を上回っているが、以降、20歳代の投票率は、他の世代と比較して最も低く、投票率の差は広がっている傾向が見られる。

とちぎ選挙ユースサロンは、平成27年9月から活動を開始した。若者の投票率向上をテーマに、若者に集ってもらい、意見交換等をとおして、若者ならではの視点で啓発活動の企画や実践等を行っている。昨年度は新型コロナウイルス感染症の関係で活動を見合わせた。参加者は学生が中心で、社会人の方にも登録いただいております、令和元年度の登録者数は約40名である。

○委員

具体的な選挙啓発の方法等について、若い人たちの投票率を向上させるために、選挙への意欲が高い人が投票できていないとなると、それは恐らく構造的な問題で、郵便投票の要件を緩和する等の制度的な話になるので難しいと思う。

意欲が低い人、どちらともとれない人に対するアプローチとして面白いなと思ったこととして、知事や選挙管理委員会の職員等有名人のモノマネをしながら、投票率アップを呼び掛ける動画をSNSに投稿するなど、選挙にはあまり関心がなくても、選挙に行こうと思ってもらえるユニークな仕掛けができると、ニュースにもなるだろうし、面白い

のではないかと思う。

栃木県の選挙のSNS面白いね、というように思ってもらえるきっかけなどが無いと、選挙に関心がないわけではないが、投票しない人の注目を集められないのではないかと考えた。

また、外国で投票率が上がった取組として、普段入れない場所に投票所を設置するという事例があった。例えば、プロスポーツクラブの待合室で投票できる、投票所にプロスポーツ選手がいるといったことはできないか。

選挙に関心をしっかり持たせていくことは、非常に大事なことであるが、一方で関心が高まったかどうか、関心の高まりによって投票率が向上したかどうかの効果測定は難しいことだと思うので、教育の部分も大事にしつつ、具体的な啓発の方法についても議論していきたい。

→事務局

投票所の設置場所を工夫する等のアイデアについて、相手方の協力が得られるかといった課題もあるが、公職選挙法の規定、設置等に要する費用等を踏まえながら、投票所を設置する市町選挙管理委員会の意見も伺ってみたい。

○委員

法律等で、ユニークな取組はなかなか難しいと思うが、海外で効果が出ている事例は、大部分がユニークなものである。投票所の周りに屋台を出して、おいしいスイーツを食べられるようにするといった事例等でないと、あまり効果が出ていないのだと思うので、何か1つ実施できると面白いと思う。

都道府県の魅力度ランキングで栃木県が最下位になったとき、私は、あまり関心がなかったが、思ったよりもそれによって栃木県が盛り上がった印象もあり、いいタイミングだと思うので、栃木県の投票率をナンバーワンにしようといった、わかりやすい旗を立てるだけでも、魅力度ランキング最下位だったときのあとだからこそ、1位になったら面白いと思う。

→事務局

デジタルを活用した啓発は非常に重要だと思っている。従来の選挙啓発は固い印象のものも多かったが、昨年の知事選では、プロスポーツ選手を起用して、少しかけ合いのような動画広告を作成する等の工夫はしているところである。衆議院議員総選挙も近く予定されているので、何か目立つ取組をして、投票を呼び掛けていきたい。

○委員

なぜ若者の投票率は低いのか、私自身の考えや友人に話を聞いて、誰に投票したらいいかわからないという意見が出た。この意見について、海外では学校で子ども向けマニフェ

ストの配布や議論を行う機会を与えているようである。

日本だと政治、政策について触れる機会は少ないが、具体的にそれぞれの政党がどのようなマニフェストを出していて、候補者は公約を守っているのかということを知る機会、さらにそこから議論や考える機会が教育の場にあると、自分の将来のこととして、選挙を考えやすいのではないかと思った。

#### ○委員

県選挙管理委員会でCMを作成されているが、若者の投票率向上に向けては、自分も選挙に行こうと思える土壌造りが大事だと思っていて、ティックトックなどのSNSの活用が大切だと思う。

あまりステルスマーケティング的になってはいけないとは思いますが、ひとネタ、ふたネタ、選挙という直接的な言葉とは違う形で発信できると若者にも浸透するのではないか。堅苦しい感じではなく、面白いなと思ってもらうことが一番なのではないかとも思う。それぞれのSNSの特徴に合わせて展開できれば、自然と若者の行動に反映されると思う。

#### ○委員

学園祭で、部活のキャラクターを決める模擬投票を行ったが、人の集まりがあまり良くて難しかった。

#### ○委員

発信は、相手の温度に合わせてと効果的だと思う。特に、温度の低い人に合わせることで大事ではないかと思う。

例えば、有名人やアイドルによる「選挙にいかないのは、ダサいよね」という動画や、知事が踊っていて「なんだろう？」と思わせておいて、選挙の話だったなど、入口は「選挙」から遠くして敷居を低くしつつもインパクトが残るようなもの。

#### ○委員

小学校の児童会長選挙が記憶に残っている。公約に学校の水道からジュースが出るようにすると掲げた候補者がいて、皆、必死に投票していた。

投票率が低いことの一因として、公約が、自分の身にどう関わってくるのかわかりにくいということがあるのではないか。また、投票率のグラフを見ると、20代になると落ち込んでおり、10代で投票したが、自分の意見が反映されない、されていないという思いもあるのかもしれない。

せっかく投票しても、変わっていかなければ投票しなくなってしまう。投票した人の意見が反映されること、投票した人の意見を受け止め、公約を実現させていくことが大切ではないかと思う。

資料7ページの投票の棄権理由「仕事があったから」について、期日前投票等の制度もあるので、投票することを自分ごととして実感できていないのではないかと感じる。

○委員

投票率が低いことについて、若者と意見交換をしてみると、投票率が低いことについて、「政治についてわからない自分が投票しても良いのか」、「投票に行くとなにかもらえるならば行く」といった意見が出る。

投票所で物を配布することは、公職選挙法の観点から考えると懸念がある。ツイッターの活用等については、昨年度の知事選挙で宇都宮市も取組み、若者の投票率の増加が見られたことから、一定の効果があったと考えており、今後もデジタルコンテンツの活用を継続していく予定である。

○委員

漫画のストーリーの展開をAとBどちらにするか、ツイッターに投稿して、「いいね」と「リツイート」の投票で決めるというものがあった。入口は漫画であり、選挙という言葉ではないが、投票という行為は盛り込まれているので、若者へのきっかけ作りとしては良いのではないかな。

○委員

若い人に向けた発信について、一口に若者といっても様々な若者がいる。若い人に向けた投票の呼び掛けはSNSだけでなく、多様な啓発を考えていきたい。

また、選挙管理委員会が全てを担うのではなく、様々な機関が関わっても良いのではないかな。例えば、親子向けとして、投票所の近くにNPO等が、子どもが楽しめるブースを設けてみるのも面白いと思う。

5 その他

次回開催予定時期 令和4（2022）年2月